

聖心会渋谷修道院聖堂について

山崎 渾子

待望の大聖堂献堂式は、一九五九年、土井大司教様によって挙行された。竹腰健造氏設計によるもので、以来キャンパスの中心に在って聖マグダレナ・ソフィアのビジョンである。『真の礼拝をささげる』教育のシンボルとなった。初代学長マザー・ブリットは、建物を繋ぐこの聖堂に日に何度も立ち寄り祈っておられた。学生の私たちも毎朝ミサ前六時一五分にはサイドチャペル側から入り、マザーの後ろ姿に倣ってチャイルド・オブ・メリーの祈りを捧げることを日課としていた。

正面の黄金モザイク壁を背に『我に來たれ』のイエス像、左には合掌するマリア像、右に幼子を抱くヨゼフ像があった。祭壇を囲む聖域は、ある篤志家の配慮によって美しい大理石が使われ、円天井の下、厳かな静謐さに満ちていた。回廊の左右には聖マグダレナ・ソフィアと聖フィリピン・デュシェーンのご絵が掲げられ、柱には十字架の道行きがある。入口近くには院長・副院長席、左右には修道女たちが聖務日祷を捧げる歌隊席が並ぶ。早朝と夕暮れのチャペルの鐘が、寄宿舎や広尾商店街に響き人々を祈りに誘った。シンプルな高い窓は清楚な雰囲気を保つ。また音響効果も良くグレゴリアンや聖歌が美し

く、朗読者の声もよく通った。ぬかずくベンチの柔らかさ、すべるような床と床暖房が居心地よい。古墳跡とも言う庭山に向かって正面扉が開き、そこで卒業記念写真を撮るのが伝統になった。

現在の大聖堂は、五十年前の第二ヴァチカン公会議の精神の下、教室に使うという意見もあったが退けられ、ルーツに戻り典礼の刷新として祭壇を中心に大きく改装された。聖具も質素に、開かれた姿勢でミサも司祭と人々との間が対面方式に変わった。聖域は開放され、復活したキリストを現す白い十字架が描かれ、赤いタイルの聖櫃が身近に置かれた。この国の文化を生かした七宝焼きタイルで美しく仕上がった壁面には、創立者が深く愛された「聖母の苦しみ」の七滴の涙のシンボルが散りばめられている。長い年月を経るうちに、なんと多くの人々がこの聖堂で祈り、みこころの愛に心を寄せたことであろうか。この聖堂からいつの時代にも、すべての人の幸せを願う「みこころの鼓動」が発信されているのである。